

メソアメリカ文明と都市

一、居住空間としての都市・生活様式としての都市

バグビー (P. Barbey) は「文明とは、⁽¹⁾ いてみれば、都市にみいだされる種類の文化である」と言う。文明を社会・文化の発展した形態として捉えようとするとき、都市がその指標ないし基準として考えられることはきわめて多い。人類史にみられる転換を五つの革命として捉え、文明の発生を「都市革命」におく伊東俊太郎の主張もそのひとつである。⁽²⁾

すでに一九五〇年、先史学者のチャイルド (V. Gordon Child) は、「都市革命 (Urban revolution)」と題する論文を著わし、都市 (city) は文明の指標として有効であり、「集落と人口密度のある程度の大きさは文明の基本的特徴である」と述べてい

松本亮三

る。チャイルドの関心は、モーガン (L. Henry Morgan) が設定した人類史の三段階⁽⁴⁾ に対して、考古学的に実証できる指標を導入することであった。すなわち、野蛮 (savage) から未開 (barbarism) への移行は食料生産の開始、当時のチャイルド自身の言葉によれば新石器革命 (Neolithic revolution) によって成し遂げられ、未開から文明への転換はまさに都市革命によってもたらされたと考えたのである。文明の端緒を問題としているため、チャイルドの都市は古代文明の最初の集落にも適用できるものでなければならず、都市共通の特徴として、次のような事象が列挙されている。⁽⁵⁾

① 最初の都市は、現代の村落より小さかったにせよ、それ以前の前集落より広く人口も稠密であった。

② あらゆる都市には、フルタイムの専門家、職人、荷役人夫、商人、役人、神官など、都市や近郊の農民に支えられる非生産者階級がいた。

③ 一次生産者は、神や神聖王に税や貢納を差し出し、その集積によって都市が維持された。

④ 村落と違って都市には記念碑的な公共建造物があり、これは社会的余剰の集積の象徴であった。

⑤ 神官や民事・軍事上の指導者は余剰の大部分を受け取り、あらゆる肉体労働を免れた支配者階級を構成した。

⑥ 支配者階級は、記録手段(文字、数字)を考案しなければならなかった。

⑦ 文字の発明は正確で予測可能な科学(代数、幾何学、天文学)を発達させた。

⑧ 社会的余剰の集積に支えられた専門家は、旧石器時代の素朴な自然主義とは異なった新たな象徴的芸術表現を発達させ、観念的で洗練された様式を形作った。

⑨ 社会的余剰の集積は、遠距離交易を可能にした。

⑩ 専門職人は、親族ではなく居住に基礎を置く国家組織で保護され、古代の都市では役割の補完性に基づく有機的連帯性に近いものができていた。

チャイルドの説く都市の特徴は、居住空間としての、言い換えれば物理的実体としての都市に関するものから、都市内部の、さらには都市を含む社会全体に関するものへと進んでいく。都市自

体に関しては、規模が大きく、人口密度が高く、記念碑的建造物を有し、居住者の地位と役割に分化がみられるということに、おそらく集約できるだろう。その他は、これに関連するいわば文明における生活様式だと考えることができる。しかし、ここで語られた文明自体の特徴と言えるもの、すなわち、税や貢納、支配・被支配階級の分離、文字の発明、洗練された芸術様式、遠距離交易、親族組織を脱した連帯性などは、物理的居住空間としての都市と不可分の関係をもっていると言えるのだろうか。また、関係をもつとすれば、その関係性が拠って立つ所は何であろうか。再考を要する問題であろう。

チャールズ・レッドマン(Charles L. Redman)は、その著『文明の興隆(The Rise of Civilization)』の中で、都市に相応する語として city と urbanism の二つを用いている。これらは置き換え可能な所があると断わった上で、彼は次のようにその相違を説明する。

urbanism は都市(city)をこれよりも単純な共同体と区別する諸特徴を意味し、また、都市(city)だけでなく、町や村も含んだ都市社会(urban society)全体の組織にも言及するものである。一方 city は、都市的状况(urban condition)に関わる重要な諸特徴の多くを見せる物理的なセクターである。⁶⁾

チャイルドの説く都市の特徴の多くは、むしろレッドマンの言う urbanism に近いものだと考えてよい。レッドマンは、多く

の都市 (city) のもつ特徴として、「①大規模で稠密な人口、②複雑さと相互依存性、③形式的で没個人的な組織、④たくさんの方々の非農業活動、⑤都市居住者へも周辺地域の小集落へも与えられる中央からのさまざまなサーヴィス」を挙げ、都市人口の下限をほぼ五〇〇人としていたが、都市の物理的様相は決して明らかになっていない。

チャイルドもレッドマンも文明の起源を問題とする先史学者である。両者に共通して言えることは、都市という本来は居住形態に関する概念を、文明という新しい生活様式発生の指標として用いようとしたことである。居住形態は社会文化的諸側面と相互に作用を及ぼしあうものとはいえ、少なくとも理論的には文明という関数に含まれる変数のひとつであるにすぎない。したがって、都市や居住形態という変数はさまざまに変異しうるものであり、環境やそれまでの歴史の影響を受けて、文明発生の時点でも多様な発現形態をとることになる。文明を都市という側面から規定しようとするあまり、居住形態としての都市が空洞化し、その空洞が文明そのものの規定によって埋められた結果がここにあると言えよう。

都市が、このように生活様式によって規定されるようになった原因のひとつは、都市社会学が形式的記述や分類からの脱皮を図り、都市住民の社会学や心理学的側面の研究を重視しはじめたことにあるかもしれない。ワース (Louis Wirth) が一九三八年に著わした「生活様式としての都市 (Urbanism as a way of

life)」は、現在でも都市に関する標準的な定義だと評価されているが、彼はこの論文において、「都市は、社会的に不均質な個人々々からなる、比較的大規模かつ稠密で恒久的な集落だと定義できよう」と述べ、大部分の頁を、世俗性、匿名性、社会的浮動性、分裂病気質など、都市内部で見られる社会関係や心理状況の記述に割いている。

西洋近代に発して地球規模で広がっていった現代文明は、文明的には驚くべきほどの均質性によって特徴付けられる。すなわちそれは、文明が本来抱えていた多様な変数の喪失であるとも言える。そのため現代都市は、現代文明が非関数化したのと同じ程度に定数化しているのだと考えることができる。このような状況の中で、特に欧米社会において、すでに今世紀前半から都市の探求が一方では形態的差異を等閑視しながら、内的関係性を重視するにいたったことも肯うことができよう。しかし、現代文明とともに、その成立以前の、時間的にも空間的にも多様な諸文明を扱い、文明の普遍性と個性を同時に問題とすると、個々の文明が存在する、あるいは存在した場としての都市や集落の形態は、社会関係からはある程度独立した変数として文明学の中で探求されなければならないのではないかと思われる。

都市という語を見、あるいは聞いたとき、われわれは果して何を思い浮かべるのだろうか。ウェーバー (Max Weber) は、『都市』の冒頭にこう記している。

都市に関するたぐいさんの定義にはたったひとつ共通した要

素がある。すなわち、都市は別々の住居の集合にはかならないが、比較的閉じられた集落であるということである。必ずそうだというわけではないが、通例都市の中で家々は密集して建てられており、今日ではしばしば壁を接している。このような構成要素の集合が「都市」の一般通念に浸透しており、都市は広い地域として量的に考えられている。

ヴェーバーはこの通念を止揚し、経済的な分化を指標とするより広い枠組みの中で、歴史的・地理的に都市の類型を考察することになる。しかし、それはヨーロッパ近代の概念の無批判な、少なくとも楽天的な拡大ではないかと問うこともできよう。むしろわれわれは都市のイメージをヴェーバーの言う通念に固定することからはじめて、時間・空間を異にして成立した諸文明のあり方、その居住のあり方を、都市を包含するがそれとは異なる観念装置の中で捉え直すことが必要ではないだろうか。その手掛かりのひとつが、ヨーロッパ化以前のアメリカ大陸の文明と居住形態に求められる。

二、メソアメリカ文明の居住形態——都市型とセンター型——

南北アメリカ大陸ではすべての地域で文明が発達したわけではなかった。文明が発達した地域は伝統的に核アメリカと呼ばれるが、核アメリカは地理的に隔たった二つの地域から構成される。ひとつは、北部を除くメキシコとグアテマラを中心とするメソア

メリカであり、もうひとつはペルーとボリビア高地とその周辺地域を含む中央アンデス地域である。核アメリカにおける文明成立をどこに求めるかについては異論があるが、文明を社会・政治的には国家に伴うものと考えれば、メソアメリカではほぼ西暦二五〇年から始まり九〇〇年まで続く古典期に、中央アンデスでは、西暦紀元前四〇〇年〜後五五〇年の前期中間期と呼ばれる時代にあたると考えることができる。

ヴェーバーが記したような一般通念としての都市を現代のわれわれが考える都市の形態的類型とすれば、それは、人口稠密な、広い、閉じられた空間であることになる。これにチャイルドなどが述べる特徴も考慮すれば、記念碑的な建造物を加えるべきであろう。このような意味での都市は、西暦四五〇年ごろのメキシコ中央高原で最盛期を迎え、しかも同時代のヨーロッパをはるかにしのぐ規模で成立していた。現メキシコ市の北方五〇キロメートルに位置するテオティワカン (Teotihuacan) である。テオティワカンでは前一〇〇〇年頃から人口増大が始まり、最盛期には二二・五平方キロメートルの市域をもち、少なくとも一〇万人、多く見積れば二五万人の人口があったと推計されている。都市全域は磁北に対して一度三〇分だけ西にずれた軸を基準とするグリッド・パターンで計画的に作られていた。「死者の大通り」と名付けられた主軸ともいえる街路沿いに、基底部の一辺が二二四メートル、高さ六五メートルを数える太陽のピラミッドなど多くの神殿・基壇複合や宮殿建築が立ち並び、その周囲にはアパートメント

式の居住区などが無数に作られた。テオティワカンの人口増加は、中央高原の中心に位置していたテスコヨ湖周辺の人口が一箇所に集中する形で起こったようで、そのため、居住者の大部分は農民であったと考えられる。しかし都市内部には、市場と思われる広場、五〇〇以上に及ぶ黒曜石製品・土器などの工房址、職人用の居住区、さらには西方のオアハカ地方出身者が住んだと思われる特殊な居住区域なども確認されている。都市は非農業活動を含む多様な職掌と地位の分化と、これに基づく地域分化を示すものであるとすれば、テオティワカンは完全に都市の基準を満たしていたと言える。テオティワカンの繁栄は六五〇年ごろまで続いたが、このころ火災に見舞われ、八〇〇年ごろに滅亡した。

テオティワカンの興隆と軌を一にして、グアテマラのペテン州を中心とする熱帯雨林地域ではマヤ文明が興った。ほぼ二五〇年から六〇〇年までの古典期前期と呼ばれる時代に、マヤ地域の中心として栄えたのがティカル(Tikal)であった。⁽¹³⁾ティカルは四世紀末から五世紀初めにかけて中央高原のテオティワカンと政治・交易上密接な関係を作り上げるようになるが、ティカルを始めとするマヤの中心集落の様相は、テオティワカンとは大きく異なっていた。

ティカルの構造は、概ね同心形に広がる三つの地域に分けて考えることができる。中核部は三本の提道で繋がれた約一・五平方キロメートルの地域で、ここには宮殿建築に加え、神殿・基壇複合、石碑・祭壇複合など、専ら記念碑的な祭祀建造物が立ち並ん

でいる。その外側のほぼ六〇平方キロメートルの範囲には、主食のひとつであったラモンナツツの木立や畑を挟んで居住用のマウンドが点在する。外縁部に向けてさらに歩を進めると、遺跡中心部の北方四・五キロメートルと南西部八・八キロメートルの所に濠がうがたれ、周縁の沼沢地と結びついてティカル社会の最外郭を構成していたようで、最終的には一二三平方キロメートルがティカルの支配域になっていたと思われる。

古典期マヤ文明では体系的な書記法、算術、天文曆法の発達を見た。碑文の解読や考古学上の証拠から考えて、神聖王を頂点とする国家組織が存在し、文明世界を現出させていたことにはまったく疑いがない。社会内部には当然フルタイムの専門家が存在していたと考えられる。しかし、一九五六年から七〇年まで一五年間続けられたベンシルヴェニア大学の発掘調査にもかかわらず、工房址や職人の居住区は、その可能性が指摘されている所がわずかにあるとはいえず、テオティワカンのように明瞭な形では発見されていない。⁽¹⁵⁾また、人口密度は非常に低かったようである。人口推計には不確実な面が多いが、例えばカルバート(T. Patrick Culbert)は、中心部へ徒歩で三〇分程度の範囲に約一万人、ティカルの政治・経済圏内全体では二万五〇〇〇人から三万人が居住していただろうと推定している。⁽¹⁶⁾古典期マヤの他の諸遺跡も、ティカルほどの規模はなかったにせよ、ほぼ同じような構造をもっていたと考えてよい。ティカルを中心とする統合は六〇〇年ごろ崩れるが、古典期マヤ文明は九〇〇年ごろまで栄えた。その後発

達の中心はユカタン半島北部に移り後古典期を迎えることとなる。テオティワカンと比較した場合、ティカルの居住形態は主として次の点で特徴付けられる。

- ① 人口が少なく、人口密度も低い。
- ② 中心部はほとんど行政・祭祀施設で占められており、居住施設が乏しい。
- ③ 行政・祭祀区域を除くと集落内の地域分化がほとんど見られない。
- ④ 一般の居住施設は密集形態をとらず散在的である。

この最後の点は重要である。テオティワカンが現代都市とも共通する密集した閉空間を形作っていたのに対して、ティカルは畑をも含んだ、いわば開放的空間の中に存在していたのである。

前述のティカルの発掘が行われる以前は、一般住居についてはほとんど知られず、マヤの諸遺跡は王族・神官階級と従者のみが住むほとんど無人の町だったと考えられていた。このイメージは平和な神権政治というもうひとつの空想と結びついて、「祭祀センター (ceremonial center)」という定義付けをマヤ遺跡に与えることとなった。しかし、センター周辺の居住地域の様相が明らかにになり、碑文の解読によって平和な社会という幻想が崩れるとともに、祭祀センターという定義は否定され、「都市」や「都市国家」という言葉でマヤの遺跡や社会を語ろうとする研究者が多くなった。かつての「祭祀センター」は都市の中の一類型として捉えられるようになってきている。たとえば、サンダーズ (Wil-

liam T. Sanders) とウェブスター (David Webster) は、先史時代のメソアメリカ文明の集落を、フォックス (Richard Fox) にならって王侯Ⅱ儀礼都市、行政都市、商業都市の三つに分類し、マヤの諸遺跡は第一の王侯Ⅱ儀礼都市にあたるものとしている⁽¹⁷⁾。

都市という概念は、前節で述べたように、形態や構造の差異をほとんど捨象して、社会関係によって規定され、いわば文明概念と同義とも言えるような使われ方をしてきた。右のような都市の分類が機能をインデックスとしているのは、都市という概念のこのようなあり方とおそらく無縁ではあるまい。しかし、重要な相違は機能にあるのではなく、集落形態そのものにあり、また、集落形態は個々の文明の構造と、あるいは文明の基底部にある理念と密接に関わっていることを考えなければならない。

ティカルのような形の集落が発展したことに對しては、いくつかの機能的要因が考えられる。駄獣と車輪を欠き人力以外に輸送手段をもたなかったこと、技術的には石期時代であり知的生産以外に見るべき産業がなかったことなどである。これは程度の差はあれ、メソアメリカをはじめ新大陸には共通して言えることであり、いわゆる「王侯Ⅱ儀礼都市」は、先史時代の中心集落形成にみられる一般的傾向であったと考えてよい。テオティワカンのような集住的な都市は、新大陸の文明成初期にあつてはきわめて特殊であった。テオティワカンでは黒曜石加工や土器製作が輸出目的で大規模に行われ、「疑似産業国家」の発展をみたのであつ

て、そのため都市内に産業セクターが形成されたのである。だが、このような機能的相違だけでは、なぜティカルとテオティワカンで空間利用の形態が異なっていたのかを、十分に説明することはできない。劣悪な衛生・環境問題を抱えながらマス・コミュニケーションの便をとって集住を選ぶか、コミュニケーションの不便さを抱えながらも自然環境へ順化して散在的な居住形態を選ぶかは、むしろ文明のエートスに関わることかもしれない。この最後の問題は今後さらに検討しなければならないとしても、集落の形態的・構造的な差異を明らかにし、文明と居住、ないし文明の空間性という問題を見通すために、テオティワカンにみられたような居住形態を都市とは異なった「都市型」と考え、ティカルのような居住形態を都市とは異なった「センター型」として捉え直すことを提言したい。

三、結語

広く新大陸文明の空間性については、紙数の関係でここでは十分に論ずることができないが、中央アンデス地域についても、モチーカなど前期中間期に現われた最初期の国家は「センター型」を基礎としていたことを指摘することができる。「都市型」の集落は、機能的には行政組織の拡大、防衛機構の必要性、そしておそらくは金属器「産業」の進展と結びついて、中期ホライズン（五五〇年～九五〇年）のワリ国家やサン国家の発達の中で興ったと考えられる。新大陸の土着文明の最後を飾った中米アステ

カ王国の首都テノチティトラン (Tenochtitlan) や南米インカ帝国の首都クスコ (Cuzco) は、スペイン人征服者の記録から明らかにように、疑いなく大都市であった。だが、核アメリカでは、先スペイン期を通して「センター型」集落として現われた文明のありかたが、「都市型」の文明と並行して、あるいはこれに包含されながら存続したと考えうる可能性もある。このような「センター型」の集落を支えた情報伝達機構がどのようなものであり、「センター型」の文明の理念が何であったのかを明らかにするのが、今後の研究課題である。

注

- (1) フィリップ・バグビー、山本新・堤彪訳『文化と歴史——文明の比較研究序説』(創文社、一九七六年、原著は一九五八年出版)、一六九頁。
- (2) たとえば、伊東俊太郎『比較文明』UP選書二四三(東京大学出版会、一九八五年)。伊東は、後述するチャイルドの urban revolution との用語上の類似に対して、彼の都市革命は英訳すれば urbanize revolution となり、チャイルドとは別の概念であると主張している(伊東俊太郎「文化と文明についての再定義」川田順造編『未開』概念の再検討Ⅱ(リプロポート、一九九一年)、五二～五七頁)。
- (3) V. Gordon Childe, The urban revolution. In *Con-temporary Archaeology*, edited by M. P. Leone, pp. 43-51. Southern Illinois University Press, Carbondale and Edwardville, 1972 (Reprinted from *Town Planning*

Review 21 (1950) : 3-17). p. 44.

(4) ヘルム・クンリー・ギンガンの青山道夫訳『古代社会』上巻(岩波文庫、一九五八年)。野原、未開の組織は青山道夫訳。

(5) Childe, op. cit. pp. 47-50.

(6) Charles L. Redman, *The Rise of Civilization: From Early Farmers to Urban Society in the Ancient Near East*. W. H. Freeman and Company, San Francisco, 1978, p. 215.

(7) *ibid.* p. 216.

(8) *ibid.* p. 215.

(9) Louis Wirth, *Urbanism as a way of life*. *The American Journal of Sociology* 44 (1938) - 1 : 1-24, p. 8.

(10) Max Weber, *The City* (translated and edited by Don Martindale and Gertrud Neuwirth), *The Free Press*, New York, p. 65.

(11) 本稿における文明の取り扱いは「国家として知られる特殊な社会・政治的組織形態を伴ったもの」として、複雑な文化現象」であるとの V. Flannery, *The cultural evolution of civilizations*. *Annual Review of Ecology and Systematics* 3 (1972), p. 400 によつて示されている。詳しくは、拙稿「文明の起源とその権力と象徴——未開からの照射——」『文明研究』第 5 号、1-10 頁参照。

(12) ナナト・トロンと題して記された René Millon (ed.),

Urbanization at Teotihuacan, Mexico. University of

Texas Press, Austin and London, 1973, William T. Sanders, Jeffery R. Parsons, and Robert S. Stanley, *The Basin of Mexico: Ecological Processes in the Evolution of a Civilization*, Academic Press, New York,

San Francisco and London, 1979 によつて示されている。拙稿「マキソの文明」『トキヤン』(大貫良夫訳) 雑誌 1977 年、1-3 頁。同頁に写真・図版による詳細な説明。

(13) ヘルム・クンリー・ギンガンの Syllabus G. Morley and George W. Brainerd (revised by Robert J. Sharer), *The Ancient Maya*. 4th edition. Stanford University Press, Stanford, pp. 272-293 によつて示されている。

(14) Dennis E. Pleston, *Inter-site areas in the vicinity of Tikal and Uaxactun*. In *Mesoamerican Archaeology: New Approaches*, edited by Norman Hammond, pp. 303-311. University of Texas Press, Austin, 1974, p. 303.

(15) Joyce Marcus, *On the nature of the Mesoamerican City*. In *Prehistoric Settlement Patterns*, edited by Eyon Z. Vogt and Richard M. Leventhal, pp. 195-242, University of New Mexico Press, Albuquerque, 1983, pp. 219.

(16) T. Patrick Culbert, *The Lost Civilization: The Story of the Classic Maya*. Harper & Row, Publishers, New York, Evanston, San Francisco, London, 1974, p. 64.

- (17) William T. Sanders and David Webster, The Mesoamerican urban tradition. *American Anthropologist* 90(1988):521-546. 引くは Marcus, op. cit. 参照 Richard Fox, *Urban Anthropology*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, 1977) 以下の機能分類を説くことである。